

羽後平鹿郡阿桜城全景 柴田樸溪筆
(うごひらかぐんあざくらじょうぜんけい しばたばいけいひつ)



1. 文化財分類 有形文化財（絵画）
2. 名 称 羽後平鹿郡阿桜城全景 柴田樸溪筆
3. 員 数 1 幅
4. 時 代 大正時代
5. 作 者 柴田樸溪（嘉永 5 年-大正 11 年 1852-1922）
6. 品質・形状 軸装 紙本水墨画
7. 寸 法 等 本紙 縦 82.0 cm×横 155.6 cm
外寸 縦 173.8 cm×横 158.4 cm
落款 樸溪寫 白文方印「平章口班」 朱文方印「樸溪漁者」
8. 所有者の名称及び住所 横手市 横手市中央町 8－2
9. 資料の概要

横手出身の画家 柴田樸溪の作。横手川に架かる蛇ノ崎橋から望む横手城が、輪郭線を用いず一筆で対象の陰影や立体感を出す「付立て」技法などで平明に表現されている。写生を重視する四条派の画家らしく、下根岸町から大手門に続く七曲坂、二の丸、武者だまり、入母屋の大屋根を五つ連ねた造りの本丸、多くの門が描かれている。

作品の状態は、破れや折れなどはなくおおむね良好であるが、カビの発生にともなうメイラード反応によって全体に褐色の斑点が見られる。

10. 資料価値

明治から大正にかけて当地方で活躍した日本画家柴田樸溪の作品は、旧家に多く所蔵されているとされる。知られる中で大幅としては他に例がなく、この作品が最も良く知られており代表作といえる。また、焼失前の横手城を描いたものは、江戸時代の城下絵図などがあるが、全景を詳細に描いた作品は他に確認されていない。

11. その他参考となるべき事項

樸溪は、四条派の画家であった柴田南谷(享和2年—明治6年 1802-1873)の子で、三十代で京都の幸野樸嶺(弘化元年—明治38年 1844-1895)門下となる。帰郷後は、手賀菰圃や小松鳳来などの門人を育て、横手における明治から大正にかけての代表的な画家である。その作風は、「筆致端肅墨氣蒼古を以て賞せられ、山水は其最も得意とする處なり。」(『何陋軒印譜』 藤澤櫻里筆 「柴田樸溪翁略歴」)と評される。

この作品について、『横手郷土史 資料 第二十九号』(横手郷土史編纂会昭和32年)に「柴田樸溪画伯が存命中の大正十四、五年ころ羽後新報社にをつた三浦運吉(三浦委員厳父)が懇望し、画伯が炎上前の城を見てをつた一人なので、記憶を辿り。種々考証の上、彩管を執ったのが、片野重脩氏が所蔵されてゐる「阿櫻楼」で、昔時の朝倉城の威容を知る唯一の画であったのである」(佐川良視 執筆)と解説している。絵の製作を依頼主した三浦運吉と片野重脩は、出羽日報で同職であり、運吉の息子である俊一は、表具師であり郷土史家として横手郷土史研究会会長であった片野重脩と接点があった。片野氏所蔵として展示会に出品された記録のある昭和30年までに三浦家から片野家へ譲渡されたと推定され、令和2年に片野家から家屋とともに市へ寄贈された。

【参考】

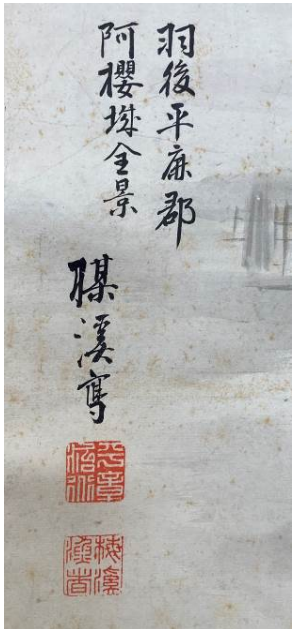
資料1 図幅全体及び落款部分写真

資料2 『何陋軒^{かろう}印譜』

^{かろう}
※何陋軒は、樸溪の雅号で、『論語』の「君子これに居らば、何の陋(いや)しきことこれあらん」より。

※藤沢櫻里(拙叟)は、藤沢嘉兵衛(慶応3年—昭和18年)の号。鍛冶町の生糸と金物を扱う豪商の家に生まれ、詩、書、画なども良くし、華道、茶道の大宗匠としての風流人でもあった。

資料 1 図幅全体及び落款部分写真





資料2 『何陋軒印譜』 ^{かろう} 柴田松谷 跋 大正 15 年 10 月 原印本

